

立て、所々の雁仲間を虐め歩き、多くは十五日、晦日に飛廻り中には途中氣が變つて宿元へ歸らず、何處かで、ぬくめ鳥となつて洒落るもあり、初めは好い鴨と稱すれども、末は裸にして格子の外へ突き出さるゝが多し。

九九 雀海中に入つて蛤となること、事實なりや

所謂吉原雀の、河岸を變へて、洲崎か品川へ蛤拾ひに行くを聞けども、雀其物が蛤となるを知らず、何かの鳥違ひなるべし。

一〇〇 狐を馬に乗せたやうとは如何なる譬にや

極々ツマラヌ人間を指して云ふ事にて、コンマ以下の意味なり、考へて見よ、コンは狐マは馬にあらずや。

一〇一 狐の嫁入といふ事、古來畫に描きて、世に傳ふれども、嫁、聲、兩親、兄弟の名を知る者なし、一々之を説き示すべし。

嫁はおこんさんとて鳥居丹波守の家來、稻荷正一郎の娘、年齢は十餘りこんく九つにて、初午鈍々齋の一子宇賀之助の許へ輿入れとなりしなり、嫁の母親はおきつ、姉は阿紫、妹はおさき、眷屬甚だ多し。

一〇二 獸類にも人間の如く姓名ありや

あるともく、猿には尻赤人真似、手長智恵内、一毛不足齋、馬には面長貧九郎、原太鼓之亟、兎には望月跳助、熊には月輪勇造、犬は大概門守を苗字として、其名は四郎、九郎多し其他獅子十六郎、犀一角、牛猛六、豹斑七、鼠忠兵衛、猩々飲助、女では猫のお玉、お三毛、おとら、お斑などが、最も幅を利かせるはうなり。

一〇三 日の出に鶴、月に兎、牡丹に唐獅子、桐に鳳凰、梅に鶯、竹に雀と云ふやうに鳥獸には夫々配合すべきものがあるが、茲に舉げた以外の例を舉ぐべし

成程ナ、先づ雁には牛蒡、黄雞に葱、鴨には芹、猫に木蓼、狐に油揚鼠に亞鉛張、さア牛と來ると大變だ、五分葱、蒟蒻、麩、白灌、慈姑なども一寸好い。

一〇四 鹿は春日明神、象は普賢菩薩、馬は觀音、狐は稻荷、鼠は大黒と夫々所屬の神佛あれども猫は何れにも使はれず、如何のものにや。

猫は八方美人にて、何れにも愛嬌を振懸け、其日々の風次第なり、併し薄情にて、小判のあるうちだけ、媚を呈すれども、之が失くなれば、直に後足にて砂を懸け、姿を見せぬ、故に何れの神佛も決して猫を近づけず、たゞ水天神だけが之を愛する由。

一〇五 狼が法衣を着たと云ふ事あれば、彼が如き兇惡無殘の獸類も出家得道せしことありや

惡に強ければ善にも強し、鬼の念佛と云ふ事もあるにあらずや、狼とて人を食ふばかりが能にもあらじ、況して狼といふ字は獸類に良の字を書く位なれば、良心發起して

茲に出家を遂げたるなり。

## 魚介之部

一〇六 龍宮の乙姫が浦島太郎と贈答したる艶書は如何なる事が書きてありしぞ龍宮城の古物展覧會に陳列せしものは、眞偽未だ判明せずと雖も、質問に應じて先づ乙姫が始めて浦島に贈りたる分を掲ぐべし。

打付に申し上候はあまりに厚かましくは候へども、おまへ様が蓬萊屋の龜之丞方に御假住居の其頃より御姿を拜して、好いたらしい殿師と、胸の思ひは鱗鏡、一夜なりともおな鮭に預かりて、こちの人と呼んで見鯛と魴鱈の神かけ念じまるらせ候へども、磯の鮑の片思ひにて、鮫々と泣暮し、一人心に秘め置くは、河豚の腹ふくる、のみ赤えいの牡蠣とは仕じ候へども、一筆しめしまるらせ候、鯉は思案の外と

思召して、失禮は比目魚に御みゆるし下された候。

先づこんなものにて、次に浦島の返事は、

御文拜見お思召の段何でいなだと申しませう、そもじの心さへ堅き石持の覺悟なれば、知らぬたこくへ飛の魚、落人の身になりても、伊勢海老の腰の曲るまで、添ひとぐる心、決してぼらには御座なく候、あなごひこ。

あなかしこの代りに、あなごひこは浦島も苦しんだものと見えたり。

一〇七 飲鯛、食鯛、着鯛、儲け鯛の各特質を挙げよ

これは鯛のやうに見えても、眞の鯛にあらず、慾ふかと云ふ鱧の類なり、されば特性と云つて、別に説明せずとも、大概分りしならん、簡略に云へば飲鯛は後に正覺坊となり、食鯛は腹がさけと云ふ鮭に變化し、河豚の如く腹部膨脹して終に破裂す、着鯛儲け鯛、伺れも慾の皮が突張つて、鮫の如くなるなり。

一〇八 鯉の種類を問ふ

鯉は思案の外なれば、其種類も中々算盤の珠に乗せ難し、されども大概は先づ八百萬程あり、中には泥水の鯉は、一名金もて鯉と名づく、海老茶の鯉は神聖と稱すれども、其實泥水よりも臭氣あり、到底近づくべきものにあらず。

一〇九 鱧立身して鯉になると云ふ説あれども眞偽如何

今の大鯰も元を洗へば皆鱧なり、然れども鱧の数は幾萬尾、其中鯉になるは實に僅少なり、折角鯉になりか、つても、忽ち地震に揺り落され、空しくのたれ死をするもの十に八九、亦憐れむべきにあらずや。

一一〇 鯉の山路に蹈み迷ひ、又鯉の山に登り詰る人もあれば、鯉は山にも住むものによ

鯉と云ふ字は魚扁に里と書く位なれば、無論山にも里にも住むものなり、即ち龍門に



を押へて動かさず、鯛は眞赤になつて跳ね返し、ナニ大海知らずがと、一氣に突戻して、鯉は五月幟の風に吹かるゝと一般、土俵の中をくるりく廻つた果に、龍門の逆落し、身體も陰の如く、へトくになつて投げ出され、鯛の勝は、實に目凄しかつた。

一一四 龍宮の眷屬にも、夫々官職々業あること、存じ候事ならんが、拙者一向不案内なれば、何卒御教へ被下度候。

左様さす、先づ海魚中の關白として、赤井鯛公、此奴が一番の巾利で、其老臣が鯉三太夫、元老には海老の腰曲伊勢守、章魚の入道は八足山天蓋寺の住職を勤め、烏賊はあれども紳士の部類に屬してイカサマ紳士と云はれて居る、其職業は何をして居るか分らぬ、鱈は口ばかり威張つて居るから大概辯護士、鯉は俠氣の兄イ、男達と云ふだらう、石持は龍宮城石垣の修繕で人足に雇はれ、飛の魚は火消人足、白魚は藝妓となりて縹緞自慢、鯖はどうしたものの濱邊に打揚げられ、ビク／＼して居る中に、身體

が臭つて来て、土地の人の厄介、目も鼻も明かぬ海鼠も持て餘しものだが、河豚と云ふは腹毒があつて、動もすれば殺人罪を犯す、危険千萬な奴、これらは一定の職業もなき、龍宮の喰ハ潰し、鮑と云ふ奴も自分の面も見た事がなくて誰に戀をして居るのか、片思ひに焦れ死、死骸は猫の腕となつて末代の耻曝し、イヤどうも際限がない。

一一五 はまぐりは矢張栗の種類なるや

イヤサくりと云つても栗の種類ではない、たとへば牡蠣と云つても柿にあらざるが如しだ。

一一六 土佐武士、薩摩武士などは、名の聞えたる武士なれども、鎌倉の鯉が鎌倉武士となつて、世に著はれたるを聞かず、其理由如何

鎌倉の鯉は兎角お先走りで思慮淺く、江戸へ飛出すや否、どてらのどんつくと云ふものを打殺した罪で、一寸二寸と斬りきざまれて、山葵の辛い目に遇ひ、敢なき最後を

遂ぐる始末、イヤ最う武士に出世するどころの騒ぎにあらずサ、漸く生命が助かつたところで鎌倉武士では通れずなまくら武士からなまり武士と呼ばれ、竹の節か木のふしの如く邪魔にされ、干物の代りの惣菜に使はれ、又は田舎稼ぎに出掛けるが關の山だ。

## 昆虫之部

一一七 米を喰ふ蟲は如何なる性質形状を有するや

米を喰ふ蟲は長五尺内外にて、兩手兩足あり、天地間の動物中最も横着にて自分が獨り勝手に萬物の靈長と定め、種々の熱を吹く厄介の蟲なり、己が身の臭きを知らざるは放屁蟲の如き、口に甘きを含みて、尻に針あるは蜜蜂の如く、執念深きは蛇の如く能く／＼觀察すれば、大抵呆れ返るの一種なり。

一一八 守宮は何の罪ありて黒焼となりしや

守宮はお戀とて、元は井戸屋の愛娘、井の底深く契る男ありて、それに遇ひたさの乙女心より、井戸側に火を放け、八百屋お七の二の舞を演じ、火刑に處せられしが、腹だけ眞赤に焼爛れて、背は黒焦け、たとへ死んでも魂は此世に止まり、長く戀に惱める人々を保護し、其願を果させんと、さてこそ男女媒介の神となりしなり、今は出雲の大社に召されて、神使になれる由。

一一九 胡麻の蠅を防ぐ法を問ふ

旅などには胡麻の蠅に附纏はるゝは、一體キ拔の爲なれば、キカン木と云ふ木にて作りし棒を始終所持し、油断なく打振り／＼旅行すべし、キカン木さへあれば、胡麻の蠅は決して近づかず。

一二〇 蛙の歌會には如何なる名歌を詠みたるや

さればなり、蛙の詠みたる歌と云へば、左の二三首などが、先づ面白きものならん  
頬被り向ふを見ずに飛び出し

勝手違ふて池へボツチャン

古池水音

思ふこと云はねば腹のふくれ行く

左様然らば何か申さん

大腹かゝえ

井の中の大海知らずそれもよし

我身一つの外になければ

出目平太

鼻筋は背中を通り尻へ抜け

涙の落る路も是なり

ひよこ助

一二一 蟪蛄が斧といふもの昔より名高き物なれども、外の蟲にも斯る什物を所持したるものありや

曾て蟲類博覽會と云ふものを一見せし事あり、陳列の品は何れも由緒あれば左に手帳に記し止めたるを紹介せん。

蟬の羽織 薄くして透き通り、夏向は如何にも涼し氣なり。

蜈蚣の草鞋 一足にて百本の足に穿くべし、最も精巧を極む。

蚊の縞ズボン 藪中倉右衛門の製造に係る。

蚯蚓の長着 傘袋を引延したるが如し。

螢の燈籠 失火の患なし。

行夜蟲の大砲 一發にして臭氣十里に振ふ。

其他蝸牛角の前立打つたる兜蜂の毒針、米搗蟲の白と杵、毛蟲の毛裘等甚だ多し。

一二二 跡墓の性質形狀産地を問ふ

跡墓は大酒國醉郷里の酪酊池に産す、其色赤くして茹菴魚の如く、目の玉すはり、吐

く息は熟柿に似たり、鳴く聲ぶうくと聞えて、人に嫌はる、正覺坊、猩々、よたん坊内損など、無二の交りを結び、時々長夜の宴を開く、大蛇丸と酒合戦の事より相怨み、百年の讐敵となり、楯を築き向ふは氣強しと雖も、大蛇丸のために呑まれんとするごとく屢々なり。

一一三 箱入娘に付く蟲は如何なる種類ぞ

のツペりして、お平の長芋然たるもの多ければ、芋蟲の類ならん、ころころ轉び會ひたる後に付くもの故、必定それに違ひなし、大事の箱入も之がため疵物となつて賣口遠し、土川干をする時も、注意せざれば、戀風に吹かれて忽ち此蟲を生ず、或ひは戀より生じて臭き中となる故、糞蟲の類なりと云ふものあり、如何にや。

一二四 鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身を焦すと云へば、餘程悲しい事に使つてある

が、螢は何故身を焦すほど悲しき憂目を見るに至つたものであるか、其來歴

をお聞かせ下さい

これは能うお尋ね下さつた、實に彼は薄命なものです、元は山吹御前の一人娘で學問が大好き、車胤といふ男と夜の目も寝ずに學びの道を辿り、相應に教育もある身であつたが、一年宇治の川の夕涼みに、宮城阿曾次郎といふ優男に、焦がれ初めたる戀人と、語らふ間さへ夏の夜の短い契りの本意ない別れといふやうな次第で、段々零落れた果が、とうとう浮き川竹の尻の光で身すぎ、口すぎ、なんと情けない話ではありませんか。

一二五 油蟲は如何なる毒を有するや

油蟲はなんでも金氣のある處へ集まりて、之を吸ひ取らうとする悪い蟲で、別に毒氣もないが、本幹を枯す奴、うつかり集られないやうに用心が肝心。

一二六 米搗蟲や、促織蟲は、それ／＼職務を有すれども、其他は大抵遊んで暮



すやうなり、あれだけ多勢の蟲だから、何か用事を宛て、追い使ふ方法はありませんか

左様さナ、鈴蟲や松蟲は音楽學校の出身だから、それで身を立るとして、蝶は舞子が適當だらう、蜘蛛は電線架設工夫、螢が點燈火夫、蚯蚓には何處か新開地の開墾を行つて貰つて、蜂が針醫か、併しあんなに針跡が腫れては困るナ、百足は郵便配達、人の生血を吸ふ蚊に虱、蛭のやうな奴は到底始末が附かないから、潰しものにするより外仕方があるまい。

一二七 蟲類の人物見立と云ふのを一つお願ひ申します

先づ人に好かる、ほうから申し上げやう、舞の上手なお蝶さん、聲に惚々するはお鈴さんにお松さん、源氏名ばかり立派でも姿は潰しの玉蟲さん、次に憎がられ者で、蜘蛛のなめ吉、蛭の吸造、百足の毒助、針のある蜂公、それから蚯蚓のノツペラ坊、蟻

蝮の殿様などは可笑いたけで、毒氣のないところが、とんだ愛嬌者。

一二八 蟻の観音参りといふことあれば、蟲にも宗教心はあると見えたり、蚊、

蜻蜓、蜘蛛、其他蟲どもの信仰する神佛を問ふ

蚊は専ら文武の道を講じ蜀山の歌にも

世の中に蚊ほどうるさきものはなし

ぶんぶくと夜も寝られず

と云へば、論語の文事あるものは必ず武備ありの本文を守り、儒教主義と見えたり、蜻蜓は秋津洲の異名ある位なれば無論神道、蜘蛛は十字架のクリスチャン、蚤は赤馬の異名あれば、矢張虱と同じく観音信仰なれども、馬頭と千手の相違あり、促織は七夕の織女等なり。

一二九 フサギの蟲とはどんな蟲か

フサギの蟲は泣蟲、弱蟲と同系統の蟲で、カナシイと云ふ椎の木に生じ、始終音を垂れて居るフーサギ、フサギ何見て跳ねる、十五夜お月を見てはアねると云ふ歌あれども、あれは大反對で、實は月を見るのが大毒、百人一首にも月見れば千々に物こそ悲しけれと云ふ歌が證據である。

## 草木之部

### 一三〇

牡丹を花中の王とすれば櫻は如何なる地位に置くべきか

牡丹を花王とすること支那に限れり、我日の本にては敷島の朝日に匂ふ櫻の花こそ花中の帝王なり、苟くも日本魂あるもの、安んぞ毛唐人の定めたる掟に従つて牡丹に南面の位を許さんや、餅にしても牡丹餅の毒々しきより、櫻餅のほんのりと色付きて、體裁の好きが、我日の本の人心に適へり、自今彼岸の取遣にも、牡丹餅を廢して、彼

岸櫻の名に因みて、櫻餅を用うるこそ好けれ。

### 一三一

花に擬へて女の評判記を一つ願ひませう

婀娜な櫻の微塵も忌味なく、すつきりとして女の風情を失はぬは、何處まで江戸式の藝妓、散り際に未練らしいところのなきも、意地と立引も見えて奥床し、牡丹は美しいばかりで厚化粧のこツてりは、大名のお部屋様か、海棠は京女郎のやさしいところが取柄、梅は官女の物知ぶつて、唐様めくが面白からず、桃は田舎大盡の秘藏娘、梨の花は凄い程色の色いが、一寸目に付くところなれども、何となく淋しく、雪女郎の寒参りとは悪口なり、杜鵑花は田舎茶屋の姉さん、赤前垂の格なり、藤は遊れ女の見れば見るほど見劣りするに似たり、朝顔の果敢なき露の生命は、薄命に泣く浪人の娘、薔薇の色あり香ある身にて、棘を持つは内心如夜叉の莫連、蓮の佛臭きは、華族の未亡人様、山梔子の啞娘、鬼薊の悪婆、まだいくらもあれど、この位にて切上げ置くべ

し。

## 一三三二 木の股から人間の生れし例しありや

天然に庵羅樹と云ふ木あり、此木より生れし女を庵羅女と云ふ無雙の艶色にして、七ヶ國の大王之を争そつて、各々己が后に立てんと、終に大戦争を起すと云ふ事、翻譯名義集に見えたり、我國にては柿本の人丸は柿の木より生ずと云ひ傳ふ、木の股より人の生るゝこと珍らしき事にあらず、藪坂皷右衛門は、あたじけ梨より生ず、あたじけなし一名を文口木と云ふ、其小枝人間の爪に似て、火を點するに光明甚だ強し、皷右衛門常に之を燈火に代用す、己が親の身體を焼くと同様なれども、火葬にするつもりと思へば罰も當るまじと云へり、又意久地梨の木からは野良倉與太郎と云ふ男を生めり、かせ木、はたら木、これらは堅木の種類にて福徳屋萬右衛門と云ふ有徳の町人を生みたり。

## 一三三三 おい蘭の相場は當節どの位致します

昔は中三と云つて無類飛切が先づ三分、今の七十五錢でしたが、米は一升百文の相場の時ですから、比較的随分高いものです、當節は二圓五十錢ですが、品物がズツと落ちます、左様根こぎにして手活の眺めに致しましても、二三百圓から七八百圓、千圓と云ふ相場はありませんナ、少し古株になれば、無錢でも引取手がありません、昔仙臺侯が千兩箱を山に積んだ高尾のおい蘭などは夢にも見られません。

## 一三四 おい蘭の産地と其培養法を問ふ

おい蘭の産地は矢張東京出に限りませんが、どうも名古屋のオキヤアセ越後のスケイは不可やせん、培養法はお齒黒溝の水を掛けやして、手管をあてがうのです、四角な卵なども時々與へます、無論腐れ卵で、中味は鼻毛の枯れさうな臭が致しやす。

## 一三五 馬鹿若は何處に生ずるや

馬鹿者は野呂間家の庭一面に生へて居ます、一年中人に踏付けられて唾液を吐きかけられても、一向構はぬやうです、花ですか、花の咲く時はありません。

一三六 使ひ杉は何か材木になります

さアどんな棟梁も此の使ひ道には困りませう、杉の種類も多う御座いまして、出杉、飲み杉、使ひ杉など、申しては、持て餘しものです、一體性質が曲りくねつて、手斧の掛けやうも準繩の打ちやうもありません、叩き折つて竈の下へでもくべるはうが宜う御座いませう。

一三七 首ツ竹は何處に産して、如何なる性質を有するや

首ツ竹は足駄郡灰田村の泥溝に産す、丈は六尺位處々に氣抜の穴ありて、ブク〜音を發す、全體性根の腐つたものにて、桶の籠にしても締めなし、竹馬に作つても、矢張首ツ竹は首ツ竹で、浮み上る瀬なし。

一三八 不忍池の蓮葉は、何か効用がありますか

や、是は困つた事をお尋ねなさる、實際何の役にも立ちませんで、浮氣と云ふ風に吹かれて、ザワ〜八釜しいばかり、中にはやぶれかぶれて、泥水へ身を投げて往生するものもあります、ナニ蓮だから縁道は明いてるだらうと云ふのですか、ところがサツバリ駄目です。

一三九 金樫の木は如何にして生じ、如何なる効用あるや

金樫は、元堅木なれども、未はアタジケ梨と變ず、葉の先は熊鷹の爪に似て、人の生血を吸ひ取る、中には随分太い奴あり、下の落葉も金にしなれば、承知せず、併しアイスクリームは此木の汁を絞りて作るを最上とす、一杯之を飲めば、土用の炎天にも懐中の冷かなること八寒地獄の如し。

一四〇 耻杜若とは如何なるものぞ

杜若かきつばたは三河かはの八橋はしが名所めいしよなり、在原業平ありはらのなりひらの歌うたによりて現あらはれたり、後世こうせい其中そのうちの一いち株かぶ矢張はり八橋はしと名乗なりて吉原よしはらに花はなを咲さかせたるを、佐野治郎左衛門さのぢろざゑもんと云いふ絹商人きぬあきうど、黄金こがねの花はなをもて無理むりに八橋はしを靡なびかせんとせしが、八橋はしかぶりを振りて治郎左衛門ぢろざゑもんに耻はぢを搔かせたり、されば耻搔はぢかせつばたと云いふべきが適常てきだうなれども、治郎左衛門ぢろざゑもん籠釣瓶かごつるべといふ名刀めいたうにて、八橋はしの首くびを水みづも溜たまらず打落うちおとし、耻はぢを返かへしたれば、矢張はり耻はぢ杜若かきつばたとなりたり、水みづも溜たまらねば、杜若かきつばたは忽たちまち萎しほれて枯かる、道理だうり、合點がてんが往いつたか。

一四一 一六菖蒲しやうぶとは如何いかなるものぞ

菖蒲しやうぶの類たぐひに一八いちぱちと云いふあり、鳶尾いっはひとも書かく、されば一六菖蒲しやうぶもある譯わけなり、此菖蒲このしやうぶは道樂寺だうらくじ境内けいだいに多おほし、はだ蛟かと云いふ蛟かの集あつまる所ところにて、葉はの長ながさ一丁ちやう半はん略りやくして丁半ちやうはんと云いふ。

## 肢體之部

一四二 弱よわり目めに崇たり目めとは如何いかなるものぞ

夜よの目めも寢ねずに、脇目わきめもふらず、一生懸命しやうけんめい働はたらけば、弱よわり目めに崇たり目めなど、云いふ酷ひげい目めに出遇でであふことはありません、尤もつとも將來しやうらい目端めぼしの利かかない故せいもありませうが、好よい目めの出でないのは、ツマリ自分じぶんの仕事しごとを好いい加減かへん出鱈目でたらめにする罰ばちです。

一四三 叱しかられて目めの玉たまが飛出とびだすといふ人ひとがありますが、どふいふわけでせう

左様親父さやうおやぢの大目玉おほめたまを喰くつて、それで自分じぶんの目めの玉たまが飛出とびだすのだから差引さしひきして、幾分いくぶんが儲まうかる理窟りくつです。

一四四 女おんなは可成なるべく控ひかへ目めにするものだと云いひますが、どんな様子やうすの目付めつけにして居ゐるのです

まア亭主を敬ひ奉つて、目八分に捧げる心持で居なさい、八分は十分に比してソレ控へ目でせう、無暗に横目や上目を使つては不可ません。

一四五 卵に付いた目鼻はどんなでせう

左様のツペらぼうの處へ書いたばかりで、宛然化物見たいでせう、それを美人に見立てたのは、昔の人も餘程茶人ですナ、だから考へて見るにこれは其の玉子といふ婦人があつて、其目鼻立が好く見えると云ふ處から玉子の目鼻、玉子の目鼻と一時評判になつて、始まつた諺だらうと思ひます。

一四六 面喰ツたと云ふ事がありますが、矢張顔を喰つてしまつた事ですか

それは世の中には随分、娘の面の好いのを喰ひ物にする親達もありますナ、通常面喰ツたといふ事は、お能投者から起つた事です、喰ひ意地の張つた弟子が、師匠の商賣道具の面を盗み出し、質に入れたか賣つたかして、買ひ喰ひをしたのを、師匠に見付

けられ、ウンと叱言を云はれた事です。

一四七 泥を塗つた面はどんなです

それは達摩の面壁九年から來た洒落です、泥を塗れば面も壁になります、亭主を道摩のやうに寝かさうと、起こさうと、自由自在にする女房の行る仕事だから、理窟が合つて居ませう。

一四八 一口物に焼いだ頬は跡がどんなになります

大疵が残ります、イヤ頬ばかりではありません、手切れ足切れの難題を持ちかけられて、懐中まで痛めます、後腹の病むといふのは此事です。

一四九 獅子鼻だの、鰐口だのと云ふのが、人間の身體が他の動物から借り集め物ですか

左様ですネ、鵜の目、鷹の目、鯨の目、猫背、猫舌、馬の顔、猪首、鳩胸、鳶肩、其

他種々ありますが、つまり各動物の短を棄て長を取り、最も美術的に作つたのが人間で、敢て借物といふ譯でもありません。

一五〇 牡丹餅で頬を叩かれると、痛みますか

無論痛みます、此春の彼岸に僕の家で隣家へ牡丹餅を持つて行つたら、まだ頬べたを叩かないうちに、これはどうもお早々と頂戴して痛み入りますと云つて居たから、叩いたらどんなに痛むか知れませんが、後で聞けば頬が落ちさうだと云ひました。

一五一 頬と尻だけに、べたを付けて、頬べた、尻べたといふのは、どういふ譯です

べたく叩くと赤くなるからです、赤いものには、べたは付きもの、其證據には赤ッべたといふ事があります。

一五二 千枚張の面の皮といふがありますか

ありますとも、非常に強いもので、少し位引剥いても、蛙の面へ小便を掛けた程も感じません、あれで皮羽織を作つて、火事場へ着て往つたら好いでせう、池洒蛙々々々として居るから。

一五三 鼻が折れたとか、鼻が曲つたとか云ふ事は能く聞く事ですが、どういふ場合に曲つたり折れたりするものです

鼻は實際そんなに折れるものではありませんが、餘りむくく調子に乗つて延し過ぎると、ボキリ折れるか、グツタリ曲ることがあります、左様多くは何か他の物と衝突する場合ですナ、それと同時に面の皮もメリメリと引剥かれます、だから鼻は成るべく控え目に引つ込ませて置くほうが安全です。

一五四 頭の藥罐、齒の亂杭、唇の夜着の裾、腰の弓、尻の大道白などは拂下に  
してどの位の直段です

イヤ最う何れも潰しの利ない厄介なシロモノで二束三文の價もありません、何處か穴を掘つて埋めるより仕方がないでせう。

一五五 肩で風を切ると云ひますが、どんな刃物で切りますか

水や風は容易に切れないものですが、それを切るのですから、餘程の利器でなければいけません、先づ正宗の名刀でも肩には敵いませんから、今度白刃で切り懸けられた時は、試して一つ肩で受けて御覽なさい、昔の俠客の幡隨院の長兵衛などが、喧嘩の時に刀より先へ肩を脱ぐのも其のためです。

一五六 閻魔様は娑婆から往つた人の舌を澤山貯めてあるでせうが、所置に困り

ませうなア、それから抜かれた人の不自由はどんなでせう

イヤ閻魔に舌を抜かれるものは、何れも二枚の舌を持つて居るので、一枚は餘計なものですから、御親切に抜いて下さるのです、不自由どころか抜かれて喜んで居ます、

それから抜き貯めた舌は、即ちシタに出してベツカツコーと云ふ外國人に拂ひ下けてしまひます。

一五七 火を點す爪はどんなです

慾の深い鷹は爪を抜かれると云ひますが、人間も餘り慾が深くつて、爪を二尺も三尺も延し、火を點して燈火に代用すれば、至極重寶ですから、他の人に抜かれてしまひます。

一五八 理想的の人間は、肢體各部の位置がどんな風です

左様ですナ、先づ目は高い程がよし、鼻は低いほどが好し、腰は低いほどがよし、肩は広いほどがよし、腹が大きいほどがよし、其外注文が種々ありますが、先づ此位にして置かう。

一五九 壁に耳あり、障子に目鼻と云ふ事を人が能く云ひますが、それではまる



で化物屋敷、今日開化の世にそんな家がありますか

徳利に口あり、鋸に目がある位だから、壁にも障子にも耳も目鼻もありません。それでは化物屋敷と云ふが開化の字を君は何と讀む、矢張化物の化と云ふ字だらう、開化はツマリ開けた化物で種々の不思議を見せるから千萬里隔つても話の出来る電信あり、馬を取外しても車の走る電車あり、壁の處へ電話を仕掛けて置けば、耳もある口もある、玻璃障子なら目でも鼻でも其處を透して見える、何と合點が往つたかい。

## 衣食之部

一六〇 軍衣の二字を合せて禪と讀む、されば禪は戦争に必要なものに候哉

左様サ、戦争は國家安危の繋る處で、中々以て呑氣にブラ／＼しては居られぬ、何ても勝敗の大局に注目して、舉國一致、禪を緊かり締めて掛らねばならぬから、それで

此字は出來たものサ。

一六一 羽織と云へば、鳥の羽で織つたものでもあるやうに考へられるが、絹や

木綿で織るのはどういふ譯です

元來人間の衣服は鳥獸の形を見て眞似たもので、西洋人は四足獸の眞似、東洋人は鳥類を眞似てあります、羽織は、鳥が羽を折りて居る形を取つたから、それで羽折と云ふので、織の字は間違つて使つて居るのです。

一六二 袴の事をスワルトバートルといふのは何處の國の語です

これはサランバン國の語です、此國では肩衣の事をカターツーバル、帶の事をハラヘルトユールムなど、云つて居ます。

一六三 海老茶袴の綻び易き所以を問ふ

海老茶袴は活髪といふ毛で織つたものですから、どうも悪い蟲が附きたがる、それで

直に穴があいたり、汚點が附いたり、綻びたりするのです、殊に校風が吹亂れて、浮氣に蒸されるから堪りません、段々ボロが出て世間の笑はれものになるので困ります。

一六四 盲縞ありて聾縞なきは如何

反物の耳が崩れて居るとか、帯の耳が切れて居るとか申しますから、聾縞もあるに違ひありません。

一六五 蟬の羽の羽織とはどんなものです

土用三郎眠々齋と云ふ者が始めて織り出して作つたもので、非常に手薄な涼し氣だかどうも直に飛んで往つて困ります、外の羽織は飛出しても利足と云ふ足が附けてありますから又元へ歸りて來ますが、蟬の羽織ばかりは、秋風が立つと同時に形なし、柳原の士手へも化けて出ません。

一六六 柳原土手へは種々の幽靈が出ると云ひますが、どんな類です

イヤどうも澤山出ますから、一々申し上げられません、ホンの些ばかりお話し申しませう、先づ一番に現はれましたのが、お染の振袖、久染の古袷、何れ質屋の庫で往生した未が、一念此土に留まり、化けて出たのでせう、次は葛輪五左衛門の手に懸つて敢なき最後を遂げた二束三文之丞透屋帷子、ボロくになつてヒュードロく、又其次は古土寺のどんつく和尚、腥さを嫌ふ身にて、如何なる困果か、青葉山不如歸齋といふ法師武者に咬かされ、初走松魚之助高値といふ鎌倉武士の片身を討取らんとため、身を棄て、働きたる未が、空しき最後、血腥き臭をさせながら此處に迷つて居る。

一六七 ハイカラは當世の大流行ですが、外にもカラの種類がありますか

カラの種類は澤山あります、先づ蠻カラと云ふ奴が、昔は頗る流行したもので、今でも少しは残つて居ます、製造元は支那でせう、だから一名チャンカラとも云ひます、

昔吉備大臣が土産に持つて来たもので、仁義五丈と云つて恐ろしい長いものです、それから貧乏人の財希の切で拵へたのがカンカラ、女が惚れた男へ遣るのがシンカラ、幫間の掛けるのがドンカラ、馬鹿大盡が浮れた時に持けるのがチリカラ、否チリカラはタツボと云ふから足袋でした。

一八六 喰つて旨くないものは剣突と云ふ事がありますが、外にもまだあります

親爺の目玉、へまに拳骨などは喰つて餘りお美味ものではありません、それからアワを喰ふ、こいつも不可ません、手盛を一杯喰はせられると云ふ事もあります、何の手盛やら物が知れないので確りしたお答が出来ません。

一六九 娘を喰物にする親達があるさうですが、一體どんな娘が喰物になるのでせう

喰物になる娘は、一寸澁皮が剥けて居なければなりません、まア栗子のやうなものでせう、白玉のやうに色が白く愛嬌は味淋のやうにボタボタ垂れて、何處となく甘味があると云へば御膳上等ですが、此節は随分お粗末の品まで喰せ物にします、意地のきかない連中が、時々一口物で頬を焼いたり、手を焼いたりするものも、この類です。

一七〇 悋氣の焼餅はどんなものです

悋氣の焼餅は、胸の炎といふ火で炙り、最初は大道の大福餅のやうにフツとふくれ、狐色になつた時は、チヨイとオツに香ばしいものですが、黒焦になつては手が付けられません、段々火の手が強くなると犬も喰はないやうな騒ぎになります。

一七一 餅でない餅類を問ふ

餅でない餅類、そんなものはありません、併し待ち給へ、一寸考へて見るから、大名の槍もち、男女の間を取もち、魚の石もち、女の子持、亭主もち、何より結構なのは

金もち、下さらないのは頭痛もち、癩持、のんきなのはたいこもち、こんな問題は實にもちあつかひだ。

一七二 餅の數へ歌を一ツお願ひ申したいものです

好し來た、熱く聞き給へ、抑も餅の數々は、一ツ一人で柏餅、二ツ二人で世帯もち、三ツ身持も堅餅で、四ツ嫁子も子持となり、五ツ幾代餅、六ツむやみに焼餅は、七ツなにより嫌やな餅、八ツ家持歌を詠み、九ツ惟茂紅葉狩、十で十日の亥子餅、まづごんなものでせう。

一七三 親かうくの漬方を問ふ

親かうくの漬方は鹽が甘いと微が生へます、壓石を重くして成るべく確かり抑へ付け、大根も餘り根の太い奴は駄目です、併し元の畑が大事ですから、其つもりで早くからお心掛なさい、元來親かうくはかてい(家庭)が好いと云ふので、現今かていの

くと注文が澤山ありますが、どうも柔かいのばかりで困ります。

一七四 山の芋が鰻になるまでの經歷を問ふ

山の芋と一口に云へども、其素性を尋ねれば山畑自念承の一子にて本名とろ六、母を零餘子の前と云ふ、長じて身幹長大、姿容頗る美なり、人之を古の業平に比してお平の長芋卿と稱す、慈姑御前と偕老の契を結び、慈姑百までわしや九十九までと洒落れたり、九十九と書いてつくもと訓むより、略してつく芋とも云ふ、されどもつくいもは別にありて似て非なるものなり、一夜南山般々として雷鳴を聞く、長芋風雨に乗じて大江に出で、化して龍となりぬと思ひしが、實はによろしくとして鱗なく、鱗に似て其形長し、鵜あり之を喰はんとせしに、婉蜒として鵜の頸に纏ひ之を苦しめ、鵜の難儀となりしかば、爾來呼んで鵜なんぎと呼び、約めてうなぎとなれり。

## 器具之部

一七五 お髯の塵を掃ふ箒は何で作りますか

お髯の塵を掃ふ箒は、胡麻殻で造るのが一番好いやうです、勝手に椀椀などは到底不可ません、或ひは味噌榎木をさいらのやうにして使うのも好いさうです。

一七六 鼻に掛る眼鏡はどんなものです

これは普通の人間には掛けられません、何れ天狗になつた人の掛けるもので、向ふ見すと云つて向ふは見えません、尤も高い處から人を見下すことは肝心です。

一七七 豆腐に打つ銚子がありますか

鎌に打つ釘と共に昔から有名なものです、放蕩息子などを外へ出さないために之を以て打ち付けて置きますが、一向効験がありません。

一七八 娘を入れる箱の効用を問ふ。

此箱は能く蟲の附きたがるもので、成るべく障り蓋をして浮氣を防がなければなりません、尤も親父の堅木一方で作つて置けば大丈夫ですが、母親の甘櫪が交るため、堅固さうに見えて堅固ではありません、穴隙を鑽ると云つて、昔唐の小父さんも吐言を云つた事もあります、當節は娘がお轉馬になつて大抵の箱は蹴破つて飛び出します。

一七九 尻毛を抜く毛抜はどんなものです。

まぬけ、ふぬけ、氣ぬけなど、いふ毛を抜くもので、此毛は抜けば抜くほど澤山後から生へます、毛抜の拵へ方は矢張鼻毛を抜くのと異りはありませんが、之で尻毛を抜かれた後は、後腹が病めます。

一八〇 榎木に羽が生へ飛ぶといふ事があるさうですが、どういふ出世をしたものですか。

榎木は元ま、よ山椒の木で作つたもの、山椒は小粒でもヒリ、と辛いと云はれる位だから、自から精靈があつて、備前の國のお土一名榎鉢姫と夫婦になり、臺所で朝晩共稼ぎ、胡麻も榎れば味噌も榎り、お三の方のお氣に入りであつたが、或る朝お三の方寢惚け眼で、榎木を火吹竹と間違ひ竈の下に突込んだので、頭を大火傷、それから焼榎木となつて、碌々仕事もせず、ぶらくして暮す中、榎鉢姫も棚から落ちて二つに割れ、果敢なくも塵塚山へ葬られてから、榎木入道益々無常を感じ、再び火中に飛込み、大往生を遂げやうとしたところが異人あり、之に仙術を授けたので、一夜羽翼を生じ、何處ともなく飛んで往つたといふ話である。

一八二 行平鍋は中納言行平が發明したものでありますか。

イヤ行平が發明したのではありません、御存じの如く、行平は業平の兄様だけに中々の色男ですから、須磨へ流罪になつた時、松風村雨といふ二人の女に戀ひ慕はれ、お

前と一所に暮すなら、深山の奥のわび住居、手鍋提けても厭やせぬと、例の鍋を擔ぎ出し、小鍋立の突つき合ひをした事があるので、此名が出来たのです。

一八三 四椀棒といふ棒は何の木で拵へ、何の役に立つものですか。

四椀棒はケチン棒と同じく、ケチ／＼山に生へたアタジケ梨の木で拵へます、効用は一文錢を引缺くため、又金の蔓を捲かせるにも用ゐます。

一八四 五郎八茶碗といふのがありますが、茶碗の癖に人間らしい名を付るとは生意氣ではありませんか、それとも何か才歴がありますか。

是は昔會我五郎が八杯喰つたといふ故事から五郎八と云ふ名が付いたのです、其外道具で人間のやうな名の付いて居るものが澤山あります、巻薬の辨慶、さゝら三八、信女袋、鍋の行平、一々數へ切れたものにあらずサ。

一八五 鼻の下の長を測量する物差がありますか。

ありますよ、併し普通の物差より間延に出来て居るから、之で測量した寸尺は案外長  
う御座います、且つ一本では尺度が能く分りませんから、是非二本要ります、鼻の下  
の二本棒といふのはこれから出来たので、唐の玄宗皇帝が揚貴妃のために鼻の下を長  
くした時は物差の接足しをして測量したさうです。

一八五 尻の帆掛船の構造法を問ふ。

梵天國の一目山隨德寺門前にある大木を帆柱にします。其切端で刻んだのが即ち尻喰  
ひ観音です、尻先に風船玉をふわくくさせて、船體を軽くし、何處へでも飛んで行け  
るやうに作るのですが、今は汽船に改造して、石炭の代りに芋類を焼き、一發の號砲  
に臭烟を吹き出し、其烟の消えない中に、姿は最う見えなくなるといふ事です。

一八六 自轉車といふ字は自ら轉ぶ車と書きますが他にもそんな車があります  
か。

ありますとも、ゲイ車といふ車が能く似て居ます、だから名前も水轉と云ひます、纏  
頭も實に顛倒賃の間違ひでせう。

一八七 口車、腰車など、云ふ車は如何なる効用ありや。

口車に人を乗せて置いて、それから腰車の運轉を始めます、乗心地の好いのに浮かさ  
れて、何時までも乗つて居ると、身體は海鼠のやうにグニャク、身上は粉微塵に振  
り毀されて、魂まで天外に振り飛されてしまふ事があります、實に危険の車ですから、  
成るべく乗らないやうにすべしです、ゲイ車、ソレ車、マツ車などは、何れも此類と  
心得て居れば、間違ひはありませんけれどもツイ乗りたくなる奴で、これに乗つた後  
はどうしても火の車又はピークの風車に乗つて苦しまなければなりません。

一八八 汽車、汽船、電燈、電車、など種々の物が出来て、重寶の世の中になり

ましたが、これからどんな新發明が必要でせう。

左様サ、先づ第一に欲しいものは、戀の暗路を照す電燈、人の心中を見透す眼鏡、老人を小供に搗直す臼と杵、喰べないでも腹の空かない安樂椅子、此處に居ても世界中何處でも見える望遠鏡、人の智慧を測量する衡器、其他まだ種々の注文がありますから、それが全く出來揃はない中は、眞の文明世界とは申されません、

## 數學之部

一八九 八分されてもまだ二分残る、四分々々歸れば元になるといふ、歌あり、實に數理に適つた量見なれど、中には八分されて男の一分が立たぬと怒鳴り散す甚助あり、其算法を問ふ。

前者の如く元十分の男なれば、八分されて二分残る勘定なれども、後者は元が九分の男即ち足りぬ方なり、故に八分されると残り一分だけは、到底立ち行かぬといふ算法なり。

法なり。

一九〇 二日酔の向ふ鉢巻に、八杯豆腐で迎ひ酒一杯を引つ懸ければ如何。

圖部六を倍して十二分の酩酊となり、往來へ出れば彼方へ四人、此方へ四人合せて八人歩きとなる。

一九一 昔の諺に千兩八百、十三年とは如何なる推算に依るや。

一年を三百六十五日と見積り、毎日八百宛貯ふれば三千七百九十六貫となる、之に二割の利子を加へて四千五百四十三貫二百文、其頃は兩に錢四貫乃至五貫の相場なれば殆んど千兩に達す、一日に八百宛でも馬鹿にはならぬと云ふ事なり。

一九二 昔間男の相場を七兩二分と定めたるは何故ぞ。

これは本夫が十兩寄せと談判したるに、姦夫は堪忍五兩の相場を楯に取つて五兩で勘忍せよと云ひ、仲裁人が雙方より歩み合ひにして、七兩二分にすべしと定めたるなり、



されど姦夫は之がため八方九面して、即ち八九七兩二分を調達す、随分苦しき馳け算なり。

一九三 六道錢即ち錢六文を持つて十萬億土まで旅行するを得るとせば、一文にて幾何の里程に當るや。

一文に付き一萬六千六百六十六億土に當り、其奇零數は亡者の裾と同じく、末は烟の如く屁の如し。

一九四 八字髻に八寸のハイカラを加へ、噓八百の大法螺を掛け、五兩一分の高利の金を引す所幾何ぞ。

二進も三進も割に合す、四九八九の苦みにて、四九三十六計逃るに如かず八九七十二歳の老爺に五九勞を掛け、ツマリ零となりて、残る所なし。

一九五 歳費二千圓宛の代議士連を指して、一山百文又は二束三文と稱するは、

如何なる計算に依るや。

二千圓受取ると雖も、アイスクリームの喰ひ過にて腹を下し、大抵カラツ臀の一文無し、一山百文なり二束三文なり、手の中に残るはまだ上等の部なり。

一九六 算盤珠にも掛らぬ最も安直の物は何なりや。

芝の三文(山門)と淺草の五厘の塔なり、然れども無代程安きもの無し。

一九七 口の八丁に手の八丁を乗じ、足の三里を加ふれば如何。

バツバ六十四町が一里とお尻の用心二十八丁、之に三里を加へて四里二十八丁、これだけは確かに眞面目の勘定。

一九八 どうして九兩三分二朱の中より堪忍五兩負けて三兩を減ずれば如何。

六兩三分二朱の懸直にて手取三兩、之で仲直り酒を飲み、仲裁人に五九兩賃を出せば、差引の損毛莫大なり、ボーツマウス談判の結果と相同じ。

一九九 目尻を四十五度の角度に垂れ、鼻の下を一尺五寸の長さに引延せば其結果如何

涎の量十二萬三千四百五十六石七斗八升九合を得べし。

二〇〇 兎と龜と競争を爲すあり、兎の速力は龜に十倍す、而して龜の兎より百尺前に進みたる處にて競争を始む其勝敗如何。

未來永劫兎は龜に勝つこと能はざるべし、例へば兎は龜より十倍の速力ありと雖も、既に百尺の距離あれば、其百尺を兎が進みて龜の位置に至る時、龜は更に十尺を進み、其距離十尺なり、次に兎十尺を進めば龜又一尺を進み、距離一尺に短縮す、次に兎一尺を進めば龜は更に一寸進み、又其次に兎一寸進めば龜は兎より一分前にあり、兎一分を進めば龜は兎より一厘前にあり、兎一厘を進めば龜は兎より一毛前にあり、兎一毛を進めば龜は兎より一絲前にあり、此の如くにして永世無窮、兎と龜の距離は短縮

すと雖も、決して消滅することなく、兎は龜の前に出る能はざるべし。

二〇一 滑稽大學に於ける數學試験問題の例を示せ。

左に題例數問を掲載すべし、學者は自ら研究の資に供すべし。

(一) 桃栗三年柿八年に柚子の九年を加ふれば如何。

(二) 山王の猿は三千三百三十三疋、一疋に付、毛の數三本づゝ不足するとして總體何程不足なるや。

(三) 八千八聲の杜鵑が一聲一滴づゝの血を吐き、一滴の量一分の嘘八百分の一として總體の量何程なるや。

(四) 狸の罌丸八疊敷之に獅子の十六を乗ずれば如何。

(五) 婆ア育ちは三百直が安いとして、本直より幾割減するや。

(六) 三十振袖四十島出に、六十の浮氣を加へ、青二歳と萬年新造にて割れば、其商幾

何を得べきや。

(七)辻待の車夫自慢して曰く、己らは日本一の數學者で、かけて引くと、然らば客の乗法は如何。

二〇二 洋服三割、髻五割は商人が客を見懸けて懸直の定法なる由、猶それより上の懸直ありや。

二百三高地の廂髪を以て最も高きものとす、然れども近來二束三文に踏倒して買ふ者あれば、直段も益墮落の兆あり。

二〇三 宿六が五んつくを引懸け、天秤棒にて皿小鉢を割れば、其損害高如何。つまり大四九尻にて、四九三十六計の奥の手を出し、夜逃をする始末に立至るなり。

二〇四 地獄と極樂との距離は幾何なるや。極樂は十萬億土、地獄は八萬奈落と云へば、差引二萬里の距離なり。

二〇五 嘘八百、惡事千里とは何によりて定めたるものによ。

嘘八百は口車の回轉數なり、惡事千里は高飛びしても足が附いて自然と分りしなり、而して其元は手の長き割合によりて定めたるなり。

### 法律之部

二〇六 甲某毒舌を以て乙某の面の皮を引剥く、甲某の罪如何。

舌の劔は古來兇器として、人を傷け殺すこと甚だ多し、而して之を用うるに明暗の二様あり、暗に之を用るて人を害する、梶原景時の義經に於けるが如きは、其罪恕すべからずと雖も、明に之を用うる本件の如きは、對手亦自ら之を招く所なり、獨り毒舌として甲のみを罪すべからず、況んや乙の面皮千枚張として、二三枚位引剥くも、別に痛痒を感ずるに至らざるべし、故に刑法八千八百八十八條により甲の所爲は無罪と

して之を放免す。

## 二〇七

背筋町縫目横町千手觀音前の、のたり屋粒次郎の訴狀に曰く私儀女房

おしらと、夫婦仲睦ましく數多の子供を儲け、最も幸福に暮し居り、昨夜春  
暖に乗じ、襟元山へ花見に出で、餘念なく、其處此處徘徊せし處、何の故と  
も知らず、夫婦共人間に囚はれ、哀れや女房おしらは敷居を枕に、爪をもて  
壓し殺され、私は危き場所を逃げ延び一命を助かりしに、人間の無情なる、  
飽まで窮追して隠れ家を探し、數多の子供に熱湯を注ぎ、根絶しにしたり、  
其無情刻薄鬼畜に勝れる所行、糞はくは、彼等人間の罪を審理して、相當の  
刑に處せられんことをと。此訴狀に對する處置如何。

粒次郎の訴狀によれば、其言ふところ大に憐れむべしと雖も、要するに粒次郎自ら  
禍を招ぐ所以を隠蔽し、單に人間の無情刻薄を訴ふるに過ぎず、粒次郎が人間の生

血を吸ひ、己れが口腹を満たし、子孫の繁殖を圖る不都合の所爲は豫て聞く所なれば、  
人間が之を殺して根絶しにせんとせしもの、正當防衛の手段に外ならず。故に訴狀は  
却下すべし。

## 二〇八

五の字訴へて曰く、一二三四より十の字に至るまで字畫を省けば、他の

字と混同する恐れあるより、何人が使用するも、必ず正確に書すれど、我五  
の字は大抵頭の一畫を奪はれて、五を九と書するは何ぞ、自己の所有物を何  
の故なく掠奪せられて黙止すべきにあらず、願はくは我所有權を明かにして  
之を奪ふ者を嚴重に罰せられんことをと、此訴へに對する審理如何。

五の一畫を省きて九と書するは、五の字の所有權を故なくして奪ふが如しと雖も、一  
つ二つ三つ四つと算ふるとき、何れも、つの字一つを使用すれども、五に限りてつの  
字二つを與へて『いつ、』と稱す、されば一畫を省けるがため、他の數字より一つ餘分

に、つの字を與へて、損益相償なふに足れり、依て此訴狀の請求は、別に審理を遂ぐる必要なく、直に却下すべきものなり。

## 二〇九

人あり、巡查に對して查公と呼べり、巡查之を官吏侮辱罪として訴ふ、曰く查公の公は熊公八公と同じく、ペランメー仲間にて通用せる輕蔑の意味なりと果して然るや。

公は公侯伯子男の第一位にあり決して侮辱の意味に用べきものにあらず、頼朝公、家康公と云ふも至極の敬稱なれば、查公と呼ばるゝは此上もなき名譽なり、故に官吏侮辱罪を構成せず。

## 二一〇

臍の訴へに曰く、我元茶を沸すべき義務あるものにあらず、然るに我主人常に我をして茶を沸かさしむ、請ふ其義務のある所を明かにせられんことを、と其理非如何。

耳目鼻口何れも特定の職務あり、獨り臍は腹の中央に位して、安逸を貪り、一事を勤めざれば、稀に茶を沸す位、何でもなき事なり、若し之を嫌ひて、不平を鳴らさば、浮浪罪に問ふて、尻が谷の僻地に放逐して尻の穴と同居せしむべし。

## 二一一

戀といふ曲者の處分如何。

此曲者は到る處に跋扈して放火、殺人、毆打創傷、強竊盜、詐欺賭博等あらゆる罪惡の張本人なり、其癖近來は神聖など、僭稱を用ゐ、頭に星を戴き足に葦を踏み、海老茶連を誘拐すること甚だしく、神出鬼没容易に逮捕すべからず、故に缺席裁判として、修身禁錮の刑を宣告すべし。

## 二一二

男の魂を奪ひし女の處刑を問ふ。

手管といふ兇器を使用せしのみならず、最初目で殺して置いて、鼻毛を手繰り、尻毛を一本残らず撈り取り、而して後に魂を捲き上げしものなれば、無論強盜殺人の罪に

從ひ、閩法三百五十條に照し重きに據りて處斷すべし。

二一三 不動明王は背に火を負ひ手に兇器を持ちたるがため、放火殺人の嫌疑によりて、拘引せられたりと、其豫審の進行は如何。

如何にも物騒千萬なる彼の面構へ、たゞでさへ一癖ありさうに見ゆる不動が火を弄び劍を携へたれば、放火殺人の嫌疑は尤もなり、イヤ嫌疑のみにあらず、彼の劍こそ爺婆の臍を繰り抜き、貯蓄の金を奪ひ、胡麻の灰の仲間にも入り、種々詐欺的行爲露顯したれば不日豫審も決定すべし。

二一四 八公が襦袍を打殺したる罪如何。

初鯉を喰はんがためか、明日喰ふ米に差支へたるためか、前者の如き場合には、一時口腹の慾を恣まゝにする贅澤に過ぎざれば、其罪は重きに從ふべし、且其教唆者たる熊公も共謀の正犯として處斷せん、若し後者の如き場合にありては、情狀を酌量して

本刑より一等若くは二等を減輕すべし、最も打殺したる襦袍の死體は六ヶ月を経て、解剖に付し、柳原土手に葬るべきなり。

二一五 眞綿で人の首を縊りし際眞綿も矢張兇器とすべきや。

如何なるものにてても、人を殺すに足るべき品は、悉く兇器として取扱ふべし、たとへば美人の流し目、横目の如き、平生は最も愛すべきものなれども、一朝男殺しの罪惡を犯すに至れば、兇器として解釋を下すべし、又藪醫者が先にて人を殺せば、其ヒは矢張兇器なり。

二一六 高利貸鴉勘左衛門より、種無し權兵衛に對する貸金請求の訴訟は、何れが勝つべきや。

權兵衛は元種無しにあらず、種蒔なりしに勘左衛門のため其種をホジクられたる結果、遂に種無しとなりしものなれば、今日少し位の鴉金を借りたりとて、元を考へれば、

嚴しく催促すべきにあらず、然るに勘左衛門が無暗に阿呆々と悪口して、夜が明るや否、催促に出掛けしは無情なり、さりとて法律上借りた物を返さぬ理窟らなければ、示談にするより外に仕方なかるべし、鴉は法廷に於て勝訴となるも、諸人權兵衛のために同情を表して、之を叩き殺し、蠟燭焼にすることもあるべし、平生口の悪きがため、諸人に悪がらるゝのみにても身の上頗る危険なり。

## 奇術之部

二二七 一時に百萬圓なり二百萬圓なり自分の欲するだけの財産家になる法。  
古新聞を百圓札、千圓札など、それぐ其型に切りて、紙幣のつもりにて、大事に秘藏すべし、直ちに己れが欲するだけの財産家になること奇妙なり、尤も其紙幣は使用するに能はざれども、財産家になる秘訣は金を遣はぬに限るなり。

二二八 美人の後姿を見た時、聲を掛けずして後に振向す法。  
小石を拾つて背中に投げ付けるなり、如何にお濟しの美人でも必ず後を振り向く事奇妙なり。

二一九 角力に屹度勝てる法。

七八歳位の小兒を相手に角力を取るべし、一人前の男なれば、どんな瘦つボチでも必ず勝てること受合なり。

二二〇 美人を自分のはうへ引付ける法。

守宮の黒焼などは實に古臭し、今度新發明の美人引付法は、先づ鐵の粉をコツソリ、美人の頭に振り懸け置き、自分は懷中に大なる磁石を忍ばせ置くなり、若しそれで効能の現れざる時は、突然美人の腕を振ち上げて、否應無しに引付けるなり、これなら大丈夫間違ひなし、此奇法人の知らざる所、秘すべし、々々々。

## 二二二 星を握む法。

鹽たらひの中なかに水みづを入れ、水中すゐちゆうに影かげの映うつりし星ほしを手握てづかみにするなり、誰たれにも出で來きる事ことにて至し極ごく造ぞう作さくもなし。

## 二二三 一切病氣に罹らぬ法。

華嚴けげんの瀧たきか、淺間あさまの噴火口ふんくわこうへ一思ひとおもひに飛とび込こむなり、ペストも赤痢せきりもこれには敵かたはぬと閉口へいこうして引退ひきさかること決けつして虚言きよげんにあらず。

## 二二四 飯を喰はずして腹の減らぬ法。

パンにビフテキでも喰くつて牛乳ぎゅうにうを多量たひやうに飲のむなり、飯めしを食くはざるも空腹くうふくを感かんぜざるこ  
と最も不思議もつとふしぎなり。

## 二二五 大學者になる法。

知らざるを知らずとせよ、是これ知しれるなりといふ論語ろんごの本文ほんぶんによれるなり、されば何なに

を聞きかれても知らぬ事は知らんくといふへば知しつて居ゐる道理だうりにて、直たうに大學者だいがくしやとなれ  
るなり。

## 二二六 家内を平和に治める法。

一生しやうけん懸命けんめい職務しよくじに勵あせんで、取とつた錢ぜには一文もんも自分じぶんで遣つかはず、女房にようぼうにまかせて、どんな  
無理むりを云いはれ、どんな用事ようじを頼たのまれても、好よしくくと點頭うなづきて其命令そのめいれいに従したがへば、決けつ  
て家内かないに風波ふうはの起おこる事ことなかるべし。

## 二二七 無錢で東京中の新聞を讀む法。

徒歩かちうで各新聞社かくしんぶんしゃを一巡じゆんし、貼はり出だしの新聞しんぶんを讀よむなり、世よの中に此位このくらゐの經濟法けいぎはふはある  
まじ。

## 二二八 寢て居て喰へる法。

朝あさになつて急きふに病氣びやうきと稱しょうして、ウンく呻うなり始はじめ、何かなに旨うまい物ものでも食くつたら慮なほるか知し



らんと、自分の嗜きな物を澤山取寄せ、起きかへるのも手を出すのも嫌やなら、仰向けに寝ながら、家人に口に入れさせて喰ふなり、寝て居て喰へること實に不思議！。

### 二二二八 長座の客を直返す法。

下駄に灸を据えたり、箒を倒にして手拭を被せたりする秘傳は今日二十世紀の文明社會に通用すべきにあらず、最近の新發明は、先づ相手の客に向つて唯今急用が出来ましたから、甚だ恐縮ですが、今日は是で御免を蒙りますと自分が先へ起つてしまふなり、それでもぐづぐづして居れば遠慮なく握り拳で客の横ツ面を殴り付るなり、大抵の客はそれでサツ／＼と歸るべし。

### 二二二九 雨の降る日に、雪駄穿きにて、旅行の出来る法。

通し車に乗りて、足を地に附けぬやうにすべし、如何なる大雨にても大丈夫雪駄穿きのまゝ、旅行し得るなり。

### 二二三〇

代價を拂はずに料理店で飲食する法。

金のありさうな男を煽動で、自分は其お供となり、料理屋へ行くなり、又一法として、貸金のある料理屋へ上り込み、散々飲食した上、勘定はあれで差引いて置いと云ふも妙案なり。

### 二二三一 一文無しで生活の道を立つる秘傳。

人の顔を見れば、誰でも構はず殿り付けて、少し位疵を拵へるやうに亂暴を働か、巡查の来るまでは止めずに居て警察で調べられし時は、謀殺の覺悟とか何とか心にもなき事を仰山らしく吹き立つるなり、裁判所へ廻されても其通り、さすれば結局監獄へ送られお政府の人となつて一文無しに生活し得べし、直に捉まるやう賊を働くも、捷徑なれども、それでは人間として、實に意氣地がなさ過ぎて外聞悪し。

## 文學之部

二三三二 『つくばねのみねより落つるみなな川、戀ぞつもりて淵となりぬる』といふ歌あれば、戀といふものは、つもりて深い淵となる水の如きものなるや。

無論の事、戀は水物なり、されば若い男女が戀のために浮身をやつす時を指して、水の出端の若い同士と云ひ、又戀に關する事を濡事と云ふ、此理窟から云へば、戀女房を貰つた時、水盃をするのが當然なり、お互に死水を取り合ふといふのも、つまり死ぬまで戀する事にて、何處までも戀は水の縁を離れぬものと知るべし、失戀の結果華嚴の瀧などへ飛び込むのも、畢竟水を離れて水に赴き、前に失つたものを取返すためと見ゆ、何でも人間は水々しいうちが戀の最發達せし時なり。

二三三三 『我戀は椽の下なり古元結、誰取あけていふ人もなし』と云ふ古歌あり、

頗る名歌なりと思ふ、猶これに似たる歌ありや。

別に似たるのも見當らざれば、新に作りて示すべし。

我戀は毛の生へかゝる牡丹餅よ、ござつて居ると人は云ふなり。

我戀は下手な手習正月に、恥かきぞめの面汚しかな。

我戀は清玄坊にさくら炭、刎ねつけられて熱くなるなり。

二三三四 百人一首上の句附の成るべく新らしいところを承はりたし。

宜しい畏まつたり、先づこんなもの。

自轉車に海老茶の袴翻へす

乙女の姿しばしとゞめん

床屋にも往かれぬ頭フケだらけ

我衣手に雪はふりつゝ

接合せ見ても効なし

碎けて物を思ふころかな

ふられてはサテ勘定も惜しくなり

猶うらめしき朝ぼらけかな

いまくし廊下の草履音たへて

雲がくれにし夜半の月かな

宿六はすりこ木妻は播鉢の

われても末に合はんとぞ思ふ

雨降を前に知らせる下帯は

人こそ知らぬ乾くまもなし

二三五 次には百人一首下の句附を三ツ四ツ。

何なりとも仰せ次第左の如し。

難波がたみじかきあしのふしのまも

油断ならぬは手の長い奴

今こんと云ひしばかりに長月の

長い尻尾を出す狐かな

心あてに折らばや折らん初霜の

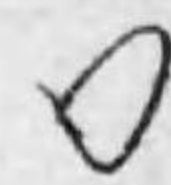
紅葉を顔にちらす乙女子

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを

牛乳の配達新聞も来る

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに

電車と電車摺りちがひけり



やすらはでねなましものを小夜ふけて

ぬしアお詩文字お取りなんしよ

今はたゞ思ひたえなんとばかりを

云ふてうしろで舌を出すなり

さびしさに宿を立ち出てながむれば

辨當かたけ歸る宿六

二三六

定家卿と云へば、古今に稀なる歌人にて、定めて女の震ひ付くやうな美

男子ならんと思ひしに、實は二目と見られぬ痘瘡の色の黒き男と聞く、それ

には何か證據ありや。

定家卿の醜男と云ふ事に就いて一の證據あり、或時卿が宮中にて或る美しき宮女を見

懸け、戀の切なる心をほのめかしたるに、女は卿の顔を指し、餘りお色が黒いので

と、刎ね付けたれば、定家卿取り敢へず。

葛城の神は夜こそ契りけれ

姿によらぬ人は心を

と詠みたり、女は餘り勝手の云ひ草やと、云はんばかりに、腹を立つて逃け行きぬ

後は卿はどら猫が牝を戀ひて鳴くに、我心を寄せ斯くなん。

羨まし聲もおしまぬのらねこの

心のまゝに戀をするかな

此歌の事より考へても、頗る御粗末に出来上りし男と見ゆ、今の世でも歌などを詠む

奴に碌な面なし。

二三七

唐詩願爲三明鏡分三嬌面願作三輕羅着三細腰の名句あり、之を日本に翻譯

すれば如何。

イヤ別に翻譯せずとも、古人が巧い文句を作り置きたり、即ち夏は扇冬は火鉢に身をなして

つれなき人に寄りもつかばや

其後「板になりたや湯屋の板に」などの都々逸も此意味を翻譯したるものなれども、餘り下卑て君子の口にするを恥る所なり、エヘン、

## 二三八

眇目の女房人に笑はれたる時「眉目のよき女は家のふためなり、女房は家の片目なりけり」と詠みたる話ありこは何の本に出でたるや。

會呂利狂歌話と云ふ本に、似たる話あれども聊か違ふところあれば、左に記すべし、併し御質問の歌はこれより出でたるものに相違なからん、狂歌話に曰く「笹岡筑後と云ひける人の家に、久しく仕へし女房お秋とて、稚き時に抱瘡の入りて、片目つぶれたり、かく不具づきければ、逢ふべき男のなくて、四十に及ぶまで、抱へおかれしを

ある人これを見て、破鍋に綴蓋と云ふことの侍り、似合しき男を遇はせん、難き事かと、よし市といふ座頭に媒介して、此不具をば、いたく隠して、如何にも形好しと語るに、限なく喜びて語ひにけり、日數経て、讒言する若き人々云ふやう、我身こそかたわならぬ、又片目つぶれし女房をかつぎける事よと、わらひあへり、さてよみてつかはしける。

よしいちが女夫のみめは悪けれど

せめて一目はあきのまへかな

此歌を聞いて、されば夫婦して、四つなるべき目の三つは失せて、たゞ一目残りたるこそたばかられけりと思へども、今さらせんかたなくて返し、

三目わろくかたちあしきも人はたい

ひとめまもるをよしいちとせよ

又宋の秦少游の傳に曰く、倡貧にして自ら救ふこと能はず、母と西京師に遊ぶ、京師は色府なり、美眇可笑、千萬を以て數ふ、若兩眼を具ふるも、猶售れざるを恐る、況んや一を眇するをや、其請中に瘖するや必せり、行くく梁に至り、濱河に舍す、逆旅少年あり、見て之を悦び爲に留飲終日、因りて大に嬖し、娶りて別邸に置き、姻黨を謝絶し、身變を執り以て之に奉じ、倡飲めば少年も亦飲み、倡疾めば、少年飲まず、或る人之を嘲けるあれば、少年忿りて曰く、予若人を得てより、世の女子を視るに、一目を餘さざるものなし、夫れ佳目一を得れば足れり、奚ぞ多きを以てせんと、これまた似た話ならずや。

二三九 文章も言文一致となりたれば、歌も其心得にて詠むことよけれ、併し關東のべいく語で詠みたる歌は如何。

「關東のべいく語止んだなら、借りても三百つんだすべい」と云ふ古き歌ありこれ言

文一致の歌の元祖、先づ其眞似をして二ツ三ツ。

飲むべいと思つて見てもからツけつ

羽織を睨いでぶちころすべい

をらアやだ尻う抓つてどうすべい

此あんねへを見損なつたか

おめへなら深山の奥で友白髪

手鍋を提けて布晒すべい

二四〇 唐詩選に美人天上落と云ふ句あり、全く天上から美人の落ちし事あり

や。

イヤ美人は雨や雪と異なり、天から降るものにあらず、たゞ美人は危ないものにて、兎角毀れ易い、割れ易いと云ふ意を詠じたるなり、されば蜀山人も、夫れ美人は天上

より落ち、牡丹餅は棚から落つ、さればさかさにつるす硝子の危うからんよりは、立  
白に捲く菰の全からんには如かじと云ひたることあり、これにて大概の意味は分るべ  
し。

二四一 狂犬に咬み付れぬ禁厭に、何とかいふ歌を掌に書く事ありと、其歌は何  
といふや。

後京極攝政入道は犬に吠えられて、

主知らぬ岡部の里を來て問へば

こたへぬさきに犬ぞとがむる

と詠みたれば、犬も歌の心を知りて、吠え止みたりとか、若し此歌にあらずや、尤も  
虎といふ字を一つ掌に書き、犬の吠えし時ひろけて見せれば好しともいふ、然るに或  
人斯の如くして、矢張手を咬れたれば、

虎といふ文字だに讀まず吠えかゝる

いぬは何とて無筆なるらん

と詠みたり、そこで犬も學校を建て、教育し、無學の犬のなくなるやうにする必要も  
あらん。

二四二 草書で書けば喜の字は七十七となり、喜の祝といふ事もあらんが、楷書  
の喜の字は如何。

矢張喜の字の祝ひあり、上が十一口、下が廿口、即ち子が十一人、孫が二十人出來た  
時に祝ふべし。

二四三 古人は座頭の頭の對句を求められて、飛脚の脚と答へ、又虎越千里藪の  
對に、蚊唸八幡森、などの名句あり、今茲に女郎起誓如ニ猫眼ニ對する一句  
を作つて見給へ。

何でもないこと、藝妓世辭皆獺皮、猫の眼に、獺皮は實に巧いものだらう。

二四四 朝顔、晝顔又夕顔の對句は如何。

南瓜、西瓜及東瓜

二四五 富士見西行うしろ向と云ふ事あり、然らば西行は背後に目の附きたる人  
にや。

富士を見るに背後を向くといふ事にあらず、西行東下りの節、追剝に取かこまれ、  
白刃にて追ひかけられたれど、後を向いて、大音揚げ、汝等此西行のふじ身を知らぬ  
か、斬られても痛くはないぞ、怒鳴りしかば、賊も恐れて其ま、通したり、これを  
富士見と間違ひしなり。

二四六 今の世の、ヘナブリとか狂歌とか云ふもの、類、昔も作る人ありしか。  
それは澤山ありたり、ズツと古い萬葉集にも其例多く、次で古今集などに俳諧歌とし

て載せたるが、古今集の選者紀貫之も大の上戸なれば、

酒瓶にわが身を入れてひたさばや

ひしほ色にも骨はなるとも

酒瓶の中へ飛び込んで、骨が酒の色に染まるまで飲みたいとは、面白い云ひ方にて、  
是等が滑稽の中庸を得たるものならん。

二四七 紀貫之の名は初め實之と云ひしが、天子の御前にて、冠を打落され、そ  
れより實の字の冠を取り、貫之と改名したりといふ説は眞なりや。

貫之の幼名は實定にして、實之にあらず、又冠は打落されたるにあらず、誤つて落  
ちたるなり、其時の歌に

今よりは紀貫之と召さるべし

實定ながら冠落せば





としては如何に、

二五一 シに目の字をなみだと讀むは、至極義理に叶ひたれど、涙の字は如何なる譯にや。

身體の中の水は大概口から這入り、下に向つて流るべきものが、上に逆戻りをするより、シに戻といふ字を書きて、なみだと讀むなり、文字と質屋、高利貸は何でも理責と記憶すべし。

抱腹滑稽問答 終

大正十年十月十九日印  
大正十年十月廿二日發

行刷

【滑稽問答】

正價金壹圓



著者	町田柳塘
編者兼發行者	東京市麴町三丁目二番地
印刷者	福田滋次郎
印刷所	東京市神田區西小川町二丁目六番地 青木音吉 東京市神田區西小川町二丁目六番地 大成社

發行所

東京市麴町區麴町三丁目二番地  
振替口座東京二〇八六番  
電話九段二〇九一番

日本書院



終